

# 日本保育学会において倉橋賞受賞

## 幼児の言葉と節づけの即興表現(3)——四歳児——

細矢 静子

十五巻十二号記載)の研究で明らかになりました。

今回は、四歳児について、昨年「うた」および「劇」をつくることを経験した三年保育児が、一年間にどのような進歩がみられるか、また、一年遅れて入園した二年保育児との間にどのような違いがあるかを調べてみました。

### ——うたの場合——

#### 方法

幼児が、毎日の生活の中で経験したことや感じたことを、即興的に「うた」にしたものと、教師が、記録、または録音して、これを分析した。

一対象 昭和四十一年度に受け持った四歳児六八名中、男児一八名、女児五〇名。ただし、組の編成は、三年保育からのもの

(以下、旧と略記)一七名と、二年保育児(以下、新と略記)一七名の混合二組。

## 二 時期 昭和四十一年四月から一年間。

三 指導過程 幼児は心が満たされている時には、自分の気持の躍動を、しらずしらずのうちに、体を動かしたり、うたのようなものを口ずさんだりして表現している。こういう機会をのがさずとらえてのばしてきたことにより、三年保育児は、三歳の時から、しぜんに「うた」をつくるということに興味がわき、全員(三四名)がうたをつくることができるようになってい。なおまた、三歳の時には、創造性をのばすために、自由遊びを中心となる保育をし、幼児が、気がねしないで行動できるような、あかるい、自由な雰囲気をつくり、話し合い、絵画製作、音楽リズムなどあらゆる面で、幼児がのびのびと自己表現できるように指導してきた。特に音楽的には、生活習慣の習得に音楽を利用したり、幼児の創造的な自由遊びに、うたやゆうぎの指導を合わせるなど、生活と音楽を結びつけるようにつとめてきたが、今年は、これらにひきつづき、さらに、次のような点に留意した。

(1) 新、旧園児の交流をはかるため、旧園児に、新園児の面倒をみさせ、子ども同士のふれ合いによる影響を多くするようにつとめた。

(2) 新園児の個々の長所を、はやすく見出し、友だちの間で認め

させるようにつとめた。

(3) 子ども間の問題は、できるだけ子どもたちの話し合いで解決するよう指導した。

(4) 旧園児は、進級、遠足、絵画製作のよろこびなど、さつそく「うた」に表現したが、新園児には、不安や、あせりを感じさせないように、「うた」をつくることを教師が要求しないで、自発的につくりだすのを待った。

(5) つくれた「うた」については、批判をしないで、大いにほめ、自信をもたせて励ました。

### 結果および考察

創作したうたの数(表1)

	一学期	二学期	三学期	合計
旧	21曲	65	90	176
新	3	28	53	84

ひとりがつくった曲数(表2)

	25曲	24	15	13	9	7	6	5	4	3	2	1
旧	1	1	1	1	1	1	4	2	2	8	5	7
新					1	2	2	1	1	2	9	16

### 一 参加の分類(表1)

(表2)

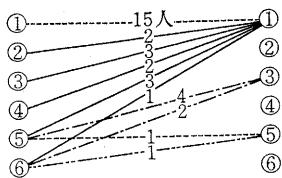
創作したうたの数は、(表

1) にみられるように、旧は新の二倍におよび、三歳の時からの経験が生かされていることがわかる。しかし学期がすすむにつれて差の割合は小さくなっている。

ひとりがつくった曲数は、

(表2)で、旧は三歳の時に

(表 4)



-----は変化のないもの  
——は①へ進歩したもの  
——は③へ進歩したもの  
-----は⑤へ進歩したもの

三歳の時に旋律として扱えるものをつくった一五名は、四歳でも同じようにつくれ、また、一八名が、それぞれの段階から進歩を示し、変化のなかつた幼児は一名だけであった。

即興創作の分類(表3)

段階	年齢		歳新 歳旧 人
	3	4	
①旋律として扱えるもの	2	0	1
②朗詠調	3	6	5
③部分的節づけ	2	0	1
④かえうた	8	2	5
⑤言葉のみ	4	0	2
⑥既成曲の再現			

(表4)である。

三歳の時に旋律として扱えるものをつくった一五名は、四歳でも同じようにつくれ、また、一八名が、それぞれの段階から進歩を示し、変化のなかつた幼児は一名だけであった。

多くのつくった幼児は、四歳でもやはり多くつくり、最高は二五曲。また、三歳の時に一曲しかつくなかった幼児で、四歳になつて五曲以上つくったものが二名あった。新では、最高が九曲となり、大きな差がみられる。

## 二 即興創作の分類(表3)

幼児の創作したうたを次の六段階に分けてみた。

旧は新に比べ、①の旋律として扱えるものが多く、④かえうた、および⑥既成曲をうた、および⑥既成曲をうた

つたものが全然なく、このことは、幼児なりに、創作の意味が理解できたと思われる。なお、三歳の時に比べての進歩の状態は、次の（表4）である。

——A子—— 三歳の時に朗詠調、四歳では旋律として扱えるものをつくったもの。

B夫の三歳の時のうた  
りんごがね ころころころころ ころがって  
うみへ おっこつちやつて  
そうして そこに くじらがいた  
そこは くじらの うみだつた  
そうして りんごが たべられちゃつた

——C子—— 三歳の時は言葉だけで、四歳で旋律として扱えるものをつくったもの。

C子の三歳の時のうた  
ばらのはなは きれいだな  
ばらのはなの ともだちは いっぱいいる

B夫、C子とともに、四歳では節がつけられるようになり、その進歩はめざましい。

## 三 言葉

次に創作例を記す。

——A子—— 三歳の時も四歳の時も、旋律として扱えるものをつくったもの。

四歳では、うたが長くなり、旋律もまとまっていることがわかる。

A子の3歳の時のうた

おはなはね どうしても おめめをぱっちりあけました  
ひらくと ても きれいだな

A子の4歳の時のうた

おはなはいろんな いろがある ピンクやいろんな いろがある  
いろんなにおいもあるね おはなのしゅるいもいろいろ  
おはなはいっぱい いろんなのがあるわ ね  
おにわにも たくさんね こうえんにも いっぱいね

B夫の4歳の時のうた

よる よる まめまきの ひがきてね パパは パパは  
はやくかえてくる バラ バラ バラ バラ (ふくはうち、おにはそと)  
バラ バラ バラ バラ おにさんは いっぱい あたって にげていく  
こどももげんきで バラ バラ バラ バラ バラ おもしろい

C子の4歳の時のうた

バッとはながきれいにさいた バッとはながきれいにさいた きれいな  
はなが とつても きれいな とつても きれいなはなが さいた



三歳の時は、同音進行が多かつたが、四歳では順次進行が多く、新、旧の間でも、旧が順次進行が多くなっている。

(5) 拍子(表10)は、歌詞とリズム表現の両角度から分析したものであるが、二拍子は、大体において、短い言葉の反復が多くなった。四歳では、形容詞や副詞が多くなり、各フレーズが長くなっているので、四拍子が多くあらわされている。

(6) リズム型は、表記のほか、二拍子では、一五種類、四拍子では、一一四種類のリズム型が使われた。また、三歳の時と比較して、細かいリズムや、付点のリズム(スキップ)が少なくなつていて、新、旧の間では(二拍子は数が少ないので省略)旧の方に長い音符の組み合わせのリズムが多かった。

以上のことから、三歳の時から、うたをつくることを経験した三年保育児は、一年間に大きな進歩を示していることがわかりました。また二年保育児に比べ、意欲的で、豊かな創造力を示し、全員がそれぞれ独創的なうたをつくり、即興的といつても、幼児なりに頭の中でまとめてから表現していて、内容も豊富で、旋律構成にあらわれた音の動きにも、音域・音程・リズム型などにおいて、優れていることがわかり、教育の効果がはつきりあらわれておりました。

二年保育児は、はじめのうちは、三年保育児がつくるうたを、おどろいて、聞いていましたが、一学期の終り頃から自発的に

劇に発展させた場合

新、旧の比較

The musical notation comparison shows two rows of notes for each age group (3-year-olds and 4-year-olds). The top row is labeled '3歳' and '4歳'. The bottom row is labeled '4拍子' (4-beat measure). The notation consists of vertical bars with horizontal strokes indicating note heads and stems. The notes are primarily eighth and sixteenth notes, with some quarter notes and rests.

くりだし、二  
学期には、約  
半数位がつく  
ることがで  
き、内容も、  
三年保育児の  
段階に近づ  
き、三年保育  
児から受ける  
影響が大き  
く、急速な進  
歩を示してい  
ることがわか  
りました。

### 方法

第一次作業として劇に発展させた場合はどのようにあるかを調べてみました。

一 対象 前述に同じ。  
二 時期 昭和四十二年三月上旬から中旬。

### 三 創作過程　卒業していく五歳児を祝つての送別会に四歳児が劇をすることになった。

当時、自由遊びや、絵画製作に、研究ごつこと称して、ロケットや探検遊びが多くでてきたので、子どもたちとの話し合いで、宇宙探検隊をテーマとしてとりあげた。

話の筋はいく人の幼児の考え方をリレー式につなぎ合わせてつくり、場面の設定もみんなの話し合いできめた。

以上の条件で幼児に即興的にうたをつくらせ、その録音をもとに教師がまとめ、幼児の創作旋律の部分的補作は、日本女子大学名誉教授一宮道子氏の指導を仰いだ。

ゆうぎも幼児がつぎつぎと創作し、役割は話し合いで希望の役をきめ、劇に使う道具や背景も幼児が考え、教師といっしょに製作した。

#### 結果

(1) 三年保育児が率先してつくりだし、二年保育児も非常な興味と意欲を示し、いっしょになって、話の筋、言葉のやりとり、節づけなど、四日間でつくりあげた。

(2) 話の筋にテレビの宇宙もの、怪獣ものの影響があらわれたが、幼児の創造力がいかされ、独創的に展開された。

(3) 科学的な知識の豊富な子どもの影響が組全体において、図鑑を調べたり、教師に質問したりして、全員の宇宙に関する興味

と関心が深められた。

(4) 「うた」も湧きでるように創作され、言葉に合った節づけができた。

(5) 教師がまとめて幼児全員に教えた時、わずか二日でおぼえ、意欲の旺盛なのに驚いた。

(6) この劇をしてから、新、旧園児の結びつきが一層強くなり、今まで消極的だった幼児も目立って積極的になった。

(7) 家に帰つてからも、この劇を夢中になつて演じ、中には、好きなテレビ番組を見るのを忘れた子どももあつた。

劇の場合も、当園で一年間生活した三年保育児が中心となつてつくりましたが、二年保育児も、科学的な知識の豊富な子どもが、急に力を発揮して注目を浴びたり、うたをじょうずにつくる子どもが全員に認められたり、個々の力を十分にだして、時には三年保育児をリードするという光景もみられました。

劇の内容は、三歳の時に比べ非常な進歩がみられ、話の筋・言葉のやりとり、節づけなどに、一年間の成長がはつきりとあらわれておりました。また、自分たちでつくつた劇を演じることは、幼児にとって、おとな想像以上によろこびがあり、幼児の創造性をのばすと同時に、このことが契機となって幼児の生活に大きな発展があるということをわかりました。

つぎに「宇宙探検隊」の劇を記す。

## 「宇宙探検隊」

探検隊員登場（次のうたに合わせてゆうぎをする）

$\text{♩} = 84\text{位}$

歌詞 (Lyrics):

ぼくたち宇宙探検隊  
うちゅうにつきとかたいようがあるね  
ちきゅうでつきをみるとときは  
きれいにひかってみえてるね  
つきにはなーにがあるんだろ  
たからものがあるか  
かいじゅうがいるか  
つきのせかいにいってみよう  
それいけそれいけつきにいけ

探「基地のみなさんいってまいります」「宇宙博士いってまいります」

博士「ご成功を祈ります」「気をつけていっていらっしゃいね」

隊長「全員宇宙船豊明号に乗り組め」隊員「ハイ」（ロケットに乗り組む）

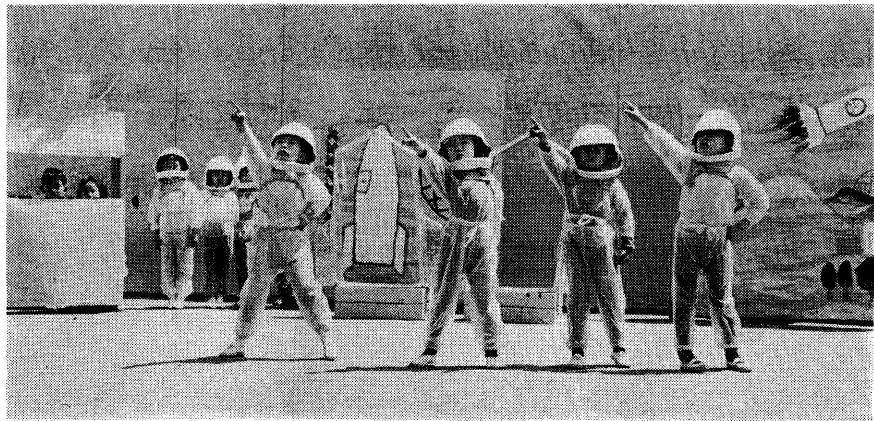
$\text{♩} = 104\text{位}$

歌詞 (Lyrics):  
ロケットしゅっぱつ  
うれしいな

探「出発準備完了」

全員「5, 4, 3, 2, 1, 0, 発射」

全員「ヒューン」（ロケット発射、とびまわる）



「ぼくたち宇宙探検隊 宇宙に月とか太陽があるね…」

$\text{♩} = 104$ 位

たかくとびだしてまつしぐら ほうめいごうはとんでいく

(ロケット止まって、あたりをながめる)

$\text{♩} = 92$ 位

うちゅうはひろくてまったくいいね おほしがあってきれいだな  
探「金星はどこかしら?」「地球は知ってる、あそこの星だ」

$\text{♩} = 92$ 位

おほしがいっぱいいっぱいなんだかめがくらみそう いっぱいだ  
星の子登場(登場の音楽は補作につき省略、次のうたに合わせてゆうきをする)

$\text{♩} = 96$ 位

わたしはほしのこキラキラキラ ひかつてひかつて

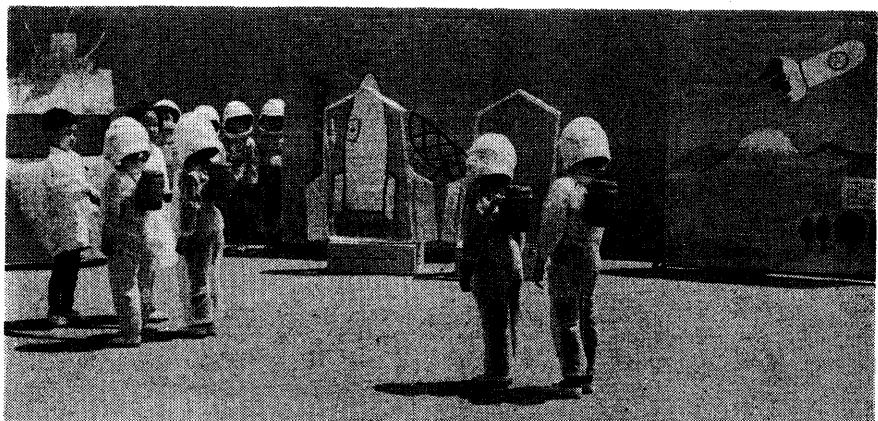
またひかるわたしはほしのこキラキラキラ

星「おや?むこうからとがったものがとんでくるわ、なんでしょう。いってみましょう」

星「いってみましょう、いってみましょう」

$\text{♩} = 63$ 位

なにかがなにかがきたよ だれかがだれかがおりてくる だれだろな



「宇宙博士いってまいります」「ご成功をいのります」

星「変な服を着ているわね、空をとべるみたいよ」

星「あなたたちはどこからきたの？」

探「僕たちは地球からきた人間だよ。宇宙船豊明号の乗組員」

星「背中にしょっているものはなーに？」

探「これは酸素ボンベだよ」

「僕たちは月に探検にいくんだよ。月はもっと遠いですか？」

星「もうすこしですよ。これは宇宙の地図です。これを持っていけば何でもわかります」

探「どうもありがとう」「さようなら」

(星退場。ロケット再び出発、月の世界に到着)

$\text{♩} = 104\text{位}$

A musical score for the scene where the probe reaches the moon. It consists of two staves of music. The top staff is in G major and 2/4 time, with a tempo of 104 BPM. The bottom staff is in E major and 2/4 time, with a tempo of 88 BPM. The lyrics in Japanese are written below each staff.

つきのせかいにとうちゃくだぼくらぼくら (宇宙探険隊オーダー)

探「さあ、これから月の探検だ」「この地図を一度みてみよう」

「なになに？ こっちにいくと岩かけに怪獣がかくれている」

$\text{♩} = 88\text{位}$

A musical score for the scene where the probe finds a monster. It consists of two staves of music. The top staff is in E major and 2/4 time, with a tempo of 88 BPM. The bottom staff is in E major and 2/4 time, with a tempo of 88 BPM. The lyrics in Japanese are written below each staff.

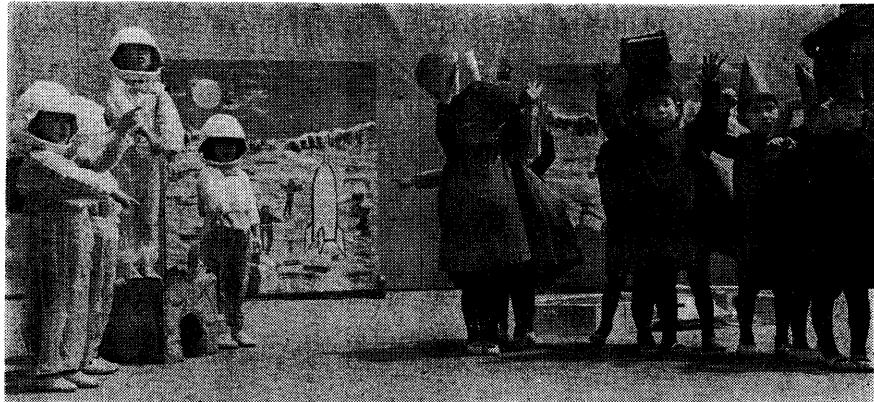
かわいじゅうはこわいぞとつてもとつてもこわいなこわいぞこわいぞこわいぞこわいぞ

怪獣登場

怪「ウォー、おれたちは月怪獣だ。人間どもはどこにいる。はやく食べたい腹ペコだ。ウォー、ウォー」(探検隊をおそう)

探「よし、こうなったら催眠術だ。手をあげろ、手をあげろ、手をあげろ。目をつぶれ、目をつぶれ、目をつぶれ。ねむれ、ねむれ、ねむれ。おなかがくすぐったい、おなかがくすぐったい、おなかがくすぐったい……エイ」

怪「ウフフフ、おなかがくすぐったい、催眠術はいやだよ」



「よし、こうなったら催眠術だ、手をあげろ、手をあげろ…」

探「どうだ、まいったか」

怪「まいった、まいった。助けてくれ」

探「これから月の世界を案内しろ」

怪「ヘイ、かしこまりました」（怪獣の案内で探検する）

探「なんだ、月の世界ってつまんないな、暗くてさびしいだけだ。そうだ、いいことがある。ここに花を咲かせよう」「ビピー、ビピー、月探検隊より本部へ」

博士「ビピー、こちら本部、こちら本部」

探「月の怪獣はやっつけた」

博士「それはよかった」

探「月の世界は何もない。空気がなくても、どこでも咲く花の種を持ってきてください」

博士「了解、了解、豊明三号たちに出発」（豊明三号発射し、月の世界に到着）

探「豊明三号、只今到着。花の種を持ってきました」「それ種まきだ」

花登場（次のうたに合わせて登場）

$\text{♩} = 112\text{拍}$

パラリンコ パラリンコ それまけ それまけ パラリンコ  
こつちのほうにパッとさいた あつちのほうにパッとさいた  
巴拉リンコ バラリンコ それまけ それまけ バラリンコ

怪「わあ、きれいだ、きれいだ。うれしい、うれしい。こんなきれいなものみたことがない」

全員登場「バラが咲いた」のかえ歌に合わせてゆうぎをして終わる。

### ま と め

三年保育児が二年保育児に比べ、「うた」の場合も「劇」の場合も、多くの点で優れていたということから、幼児の創造性は、数多くつくることによって高められ、質的にも高度になつていくものであるということがわかりました。音楽の面では、とくに幼児は教えられたことを再現するということが多くなつております。

幼児期は聴覚がもつとも発達するといわれておりますので、この時期に、しっかりとした音楽的感覺を身につけさせるために教えこむことも必要でありましょうが、しかしながら、この時期にこそ、豊かな創造力をもつた人間を形成するために、音楽をおしての創造活動も活発であつてほしいものです。

幼児にとつては、「うた」や「劇」をつくることは、少しもむずかしいことではなく、自由に絵をかいたり、お話をつくったりすることと同じように、楽しいことのひとつです。遊びとしますことを望んでおります。  
(豊明幼稚園)